

中北百合さんを偲んで
(追悼文集より)



百合さんを偲んで

橋本秀則

震災からすでに二ヶ月ほどが過ぎようとしているが、二年六組の教室は、以前のようには活気をとりもどしている。

しかし、何かが違う。そこにいなければならぬはずの中北百合さんの姿が、今はない。

はじめてこの悲劇を耳にしたのは、あの地震の翌日だった。一瞬、何を聞いたのか理解できなかった。頭の中が真っ白になるといふのは、こういう状態をいうのであろうか。悪夢の中の出来事のようなのである。しかし、時間が経過していくにつれて、現実を引き戻された。とたんに、彼女のいつもの少し照れながら、笑みを浮かべて、話しかけてくるときの顔が、目の前に広がってきた。あの中北が・・・、信じられない、嘘に決まってる、何かの間違いだ、何度もそう思ううとしてみるが、それとは逆に涙が溢れ出てくる。

彼女と出会って二年になる。彼女は、いつも友達から、憧れられるような存在であった。クラスでもクラブでもいつも多くの良友に囲まれ、楽しそうに話をしていた。そのわけは、彼女の生き方であったと思う。彼女はすでに将来の夢や目標というものをしっかりもっていた。それをしっかり見据えて生きていたので、授業でも、クラブでも、友達とのつきあいでも、家庭での生活でも、すべてのことに対して一生懸命であった。それに加えて、自分に正直で、いやみがない。そういうところに多くの人がひかれていったのでは、と思う。

彼女には、まだまだ、やりたいことや、やり残したことがたくさんあるかもしれない。でも、たった十四年の短い人生であったけれど、いつも前を見つめて、精一杯生きてきた彼女の人生は、いいかげんに生きてきた僕の人生よりも何倍も価値があったと思う。彼女の生き方は、多くの人に何かを与えてきたと思う。悔いのない人生であったらう。そう思いたい。そうでも思わないと、あまりにも彼女が可哀相すぎる。酷すぎる。どうぞ安らかに天国へ昇って下さい。

二年六組の中北さんの机には、今日も、級友たちの手によって、真新しい花が手向けられている。二年六組五十三人の生徒の心の中に、中北さんは生きている、もちろん、僕の心の中にも・・・

百合へ

小溝 友美子

今度の地震でゆりはもう、私達といっしょに、「大きくなってからのこと」将来の夢を話し合えなくなったね。前にゆりは、「ゆりね、阪大に行って薬剤師かお医者さんになる。それでね、家がきのこの形をしてて、前にテニスコートのある家に住みたいな。」

って言ってたね。その前はニュースキャスターとか親和の生徒会長になるって言ってたね。私だって、みんなだってそれぐらいの大きな夢があったけど、ゆりが一番、夢に近い場所に立ってたよね。先生にだって期待されてたから、今だって勉強もスポーツも天国でがんばってるよね。負けないで。

私は人の人生の量はみんな同じだと思う。ただ、その中身が濃いかうすいか、長いこと生きていてなにも無かった人生を送るか短い人生を充実して日々で過ごすかの違いがそれぞれあるんだと思う。

ゆりは親孝行もしてたし勉強もスポーツも誰が見てもよかったので天国へ行ってもやり残したことを悔やむこともないと思う。天国でも私達を見守っててね。

ゆりちゃんへ

浅野 かおり

ゆりちゃんのライン引きの姿がもう見えなくなるなんて思ってもいなかった。いつもクラブの時、この下手くそな私に教えてくれた。「こうやってするんだよっ。」って言ってくれたのに。

最初、私が入ったばかりの時も、先輩の名前、全員教えてくれたね。ラケットの持ち方、素振りの仕方とかいっぱい、クラブに関係するものを親切に何回も教えてくれてありがとう。

クリスマスパーツもいっしょに楽しんだり、クラブの時もずっといっしょだったのに……。本当に信じられないよ。

ゆりちゃんには、迷惑ばかりかけたしよく面どう見てもらったけど、私は、ゆりちゃんに何もしてあげられなかった。それがくやししいし、申し分けないと思う。

今からもずっとテニス部でいてね。

中北さんへ

白井 育

地震後、少し落ち着いてきた頃に中北さんが亡くなったと知りました。えっ!?と思いました。同級生が亡くなるなんて考えた事もありませんでした。すごくショックでした。

中北さんとは中一の時も同じクラスで、結構よくしゃべっていま

した。何に対しても、真面目な人だと思えます。授業やクラブもだと思うけれど、私が一番感じたのは、テスト前です。休み時間もノートもまとめたりしているのを見ていつも感心していました。テスト直前、本当に直前の開始一分前くらいでもあきらめず、いろいろ質問してきて、私ならあきらめるのにすごいなあ……とっていました。

勉強やクラブ以外でも、中一の三学期の合唱コンクールでは指揮をしたり、中二の二学期の体育の創作ダンスの班長をしたりしていました。創作ダンスの時、私も同じ班だったのですが、なかなか意見がまとまらなくて、苦労していました。その時、中北さんは、家で考えてきれいに書いてくれました。中北さんの責任感の強さを感じました。

今でも実感がわかなくて、教室の中を見渡せば、中北さんがいる様な気がします。

百合へ

小森 杏奈

あの地震さえなかったら、一月十七日も今まで通りに過ごせたのに。あの地震さえなかったら、ゆりは六組にいたのに。今になってから、普通にくらせるのがすごく幸せなことだと気付いた。ゆりがいて、さっこがいて、こみぞがいて、ゆいちゃんがいて、まゆみがいて、えりちゃんがいて、みんながいて。休み時間にしゃべったりお弁当を食べたり、お互いの意見がすれちがっても、それが一番幸せなんだとわかった。

最近、よくゆりを見る。正確にいうと気配だけだけれど、ほんの一しゅんゆりがみんなと一緒にしゃべってる姿が目に見える。ゆりと

はもう、世界中探したって会えないけれど、やっぱりゆりは私達の仲間なんだと強く感じた。誰一人として百合がいなくなるなんて考えなかっただろう。今だって信じられない。信じるというほうがおかしいよ。十六日まではいっしょに机を並べて生活してたのに。でも、今回の地震は忘れていけないと思う。忘れることなんかできない。

今思ってみても、ゆりは十四年間を精一杯生きていたと思う。地震で…と思えば悔やむに悔やみきれないけれど、ゆりなりに一生懸命だったと思う。親の手伝いをして、弟たちの世話をして、勉強もして、それにテニス部では毎日ハードだったと思う。悩み事だってあったかもしれない。でも百合にとっては、とても充実した日々だったと思う。

ゆりに会ったのは中一の頃廊下ですれ違ったとき。中二で同じクラブになれたとき、初めてしゃべったとき、すぐくうれしかったのを覚えている。かわいいと思ったし、国語の時間に教科書を読む声が、誰よりもよくとおっていてすぐくうれしかった。百合と写った集団訓練での写真をみていると、本当にもう会えないのかな、となかなか現実を受けとめられないでいる。

ゆりはもうこの世の中にはいないけれど、私は一生ゆりと、友達でいたいと思う。私が一番後悔していることは、もっともっと話がしたかった。私の話もたくさん聞いてほしかった。それだけがすごく心残りで、申し分けないと思っている。ごめんね。

今まで本当にありがとう。安らかに眠ってね。

あんな



「冥福を祈る会」の祭壇

ガレキの山呼べど声なく

娘圧死放心の家族

都市崩壊

娘が死んでしまったんで、マンションに走りまわりました。小学生の二男が泣くの、はだしでした。そこで靴を借りて、急いで戻って来て。...

あの時、突然大きな音がして、二階の窓から飛び出そうとしたら、もう目の前は家の門でした。一階がすっかりつぶれていました。とにかく夫婦で外に出て、子供たちを助け出すのを手伝ってもらいに、友人の

マンションに走りまわりました。あの子は何にもしゃべらなかつた。死んでいました。...

五人とも二階に寝ていました。でも、私たち四人が南側。あの子だけは、北側に勉強部屋を写えています。私だけじゃありません。悲しんでも、しかたがないんです。いつまでも、泣いてちゃいけないんです。これからのことしか、考えちゃ、いけないんです。...

はどうしたの、おねえちゃんは」と泣くので、抱いてやっているんです。お父さんは、今、安國できる場所まで百合を運んでいるんです。

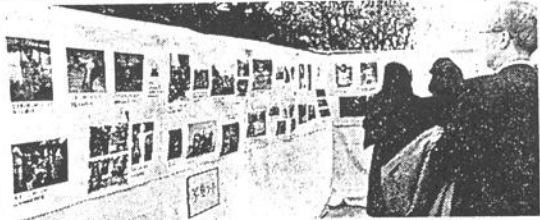
どんな娘だったか、なんて.....

思い出しても、もつしかたがありません。

こんな目に遭ったのは、私だけじゃありません。

十七日午前十一時ごろ、西宮市大井手町の自宅前で、中学二年生の長女をじくした母親。

倒壊自宅跡でお別れ



写真には百合さんの思い出が詰まっている (12日午後3時)

阪神大震災で十四歳で、級友や教師ら約五百人が亡くなった兵庫県西宮市、大井手町、私立親和女子中二年中北百合さんの「思い出を語る会」が十三日、倒壊した自宅跡で開かれた。震災後の混乱で、夫の長女、明るく、好奇心旺盛、部活の中心だった百合は、交際日記を合さんのため、両親や友人们らに託した。...

震災で自宅が倒壊。三時間後助け出された時には、もう息がなかった。家族は百合さんの宛先に身を寄せたが、親戚で法要を営めたが、一家族の光だった百合が生まれの土地で、一番葬式方法で送る。...

自宅跡地に設けた仮設テントの会場は、百合さんを悼む人たちがあふれた。午後四十八日から昨年末に撮影した最後の家族写真まで、百合さんの写真約五十枚が飾られた。中、担任の教師やテニス部の友人、小、中学生時代の級友、幼なじみから、娘が遺影に語りかけた。...

級友ら50人 思い出の写真50枚に涙